

芥川龍之介と一宮

渡邊 拓

今日は「芥川龍之介と一宮」ということでお話をさせていただくんですが、まず、芥川の作品のなかで一宮がどのように出て来ているかを見たいと思います。

芥川が一宮に来たのは若いときですが、作品では晩年の作品に多く一宮が登場します。「上総の或海岸」という書き方で、一宮とはっきりは書いてないのですが、間違いない一宮のことだと考えられるものが度々出てまいります。

その一つが「玄鶴山房」(『中央公論』昭和二年一、二月)という作品です。芥川は、初期のころは非常に構成のはっきりとした、起承転結のある、要するにストーリーが面白い作品を書いてたんですけども、中期以降はだんだんそういう作風が崩れていきます。だんだん断片化していく。あるいは話らしい話というのがなくなって、散文詩というか、そういうものに近くなっています。

「玄鶴山房」は晩年の作品としては珍しく物語的な、結構の非常にはっきりとした作品です。有名な作品なのでご存じの方も多いかと思うんですけども、堀越玄鶴という画家が肺結核で死んでいく様子を書いていく。それだけで非常に暗い小説であるというのとは分かるんですが、芥川自身も友人への手紙で「暗タンたる小説」などと書いています。もの凄

く暗いんですね。

玄鶴は結核で寝たきりで、その妻も足腰が立たなくて寝たきりです。そして玄鶴の娘と娘婿が同じ家に住んでいるんですけども、この二人は玄鶴の病室に近づこうとしない。そこに玄鶴の昔の妾というのが訪ねてくる。

玄鶴という人は一応画家なのですが、画家として成功したのではなくて、ゴム印の特許を取って、その商売でもうかったという人です。要するに、芸術家として成功した人ではないという設定、商売で成功した人であるという設定になってまして、その成功で妾を囲うわけです。その妾が玄鶴の死の床にいろいろと面倒を見にやってくるんです。小説はそこから起こる小さな波乱を描いています。玄鶴の妻が大変嫉妬する様子であるとか、あるいは妾が連れている子供、玄鶴の息子ですね、これと娘夫婦の子供、孫ですけども、これとがけんかをするというような様子。家族の中の精神的な葛藤というか、暗闘というか、そういう暗い情景を書いていきます。玄鶴はその中で暗澹たる思いに駆られるのですが、妾だけが唯一玄鶴の心をやや優しい気持ちにする、明るい気持ちにするというふうに書かれているんです。

妾の名前はお芳と言います。この人は貧しい家の生まれで、おそらく玄鶴と同じ出身階層の人です。そしてなまりが抜けない田舎の人である。その人の出身地として「上総の或海岸」というのが出てくるわけです。上総のある海岸の生まれである彼女だけが何となく人間的な愛情を持って玄鶴に接する人なんです。

この作品の中で玄鶴が置かれている家族の状況、非常に暗澹たる家族の状況とは何か異質なものを指し示すために、どうやら上総のある海岸

というのは作品に置かれているようなのです。

似たような例として「蜃気楼」(『婦人公論』昭和二年三月)という作品があります。これは鶴沼に滞在して蜃気楼を見に行くという話です。

話らしい話のない小説というのは、芥川が提唱するんですけれども、その一例と思われる作品です。志賀直哉が書いていた心境小説、例えば「焚火」とか、そういうものと非常によく似た雰囲気を持つている作品です。一点違うところは、志賀直哉の作品は非常に安定した印象を与えるのですが、芥川の「蜃気楼」にはそういう安定感——精神的な安定感というのがないのです。たとえばこの作品には「不気味」という言葉が頻出します。何かを見ると、それが不気味に見える。いろんな符丁を探し出してしまふんです。それを自分の精神が病んでいるせいかどうかというのを、疑いながら暮らしているという様子が書かれています。それから多いのは死のイメージですね。死者のイメージというのが度々出てくる。これも非常に暗い作品です。

志賀直哉の「焚火」というような作品が、何か日本の古代的な、あるいは多神論的なものを思わせるのに対して、「蜃気楼」というのは非常に近代的な神経の揺れのようなものを表現していると、一般的には考えられています。

そして、ここにも上総のある海岸というのが出てきます。「僕等は暫く浪打ち際に立ち、浪がしらの仄くのを眺めてゐた。海はどこを見てもまつ暗だつた。僕は彼は十年前、上総の或海岸に滞在してゐたことを思ひ出した。同時に又そこに一しよにゐた或友だちのことを思ひ出した。彼は彼自身の勉強の外にも「芋粥」と云ふ僕の短篇の校正刷を読んでくれたりした。」「芋粥」という実際の作品名が出てくることから分かりますように、ここに書いてあります「僕」というのは、基本的には芥川を指すと考えていい。しかし小説ですので、直結しては問題があるんですけども、そこはあまり問わずに今日は話をします。

一〇年前に上総のある海岸に滞在したというのは、これは事実その通りなのです。ここに書かれているある友だちというのは久米正雄のことです。ただ伝記的な事実を知らずにこの作品だけを読む、普通の読者には、「上総の或海岸」というのは何でここで出てくるのかよく分からないのです。何で突然ここで思い出したんだらう。作品の中で何か必然性があるかなという、それは分からない。話らしい話がなくて、非常に構成がルーズな作品ですので、そこに引掛からない読者というののもかなり多いとは思ふんですけれども、考えてみるとあまりよく分からないんです。

しかし、実は「蜃気楼」という作品には、副題がありまして、それは「続海のほとり」となっています。「続」というからには元の「海のほとり」があるわけで、その「海のほとり」は一〇年前に友人と一宮で暮らしたその思い出を作品にしたものです。

「海のほとり」の発表は大正一四年の九月ですので、「蜃気楼」の半年前ぐらいに出た作品ですが、そこに描かれている「上総の或海岸」は「蜃気楼」に描かれた鶴沼海岸とは全く違う世界なのです。同じように海辺で暮らしていることを書いているんですけども、「海のほとり」には「蜃気楼」にあるような「不気味」さとか、死のイメージというものは全くなくて、非常に落ち着いた感じのある作品です。「蜃気楼」のような、神経的な揺らぎというものは感じられないのです。

「蜃気楼」の「僕」が「上総の或海岸」を思い出すのも、恐らくは「蜃

「気楼」という作品世界の暗さ、陰鬱さとは何か別なものを指し示すためではなかったかと思われれます。上総のある海岸、一宮というのはそのようなものとして考えることができそうです。

繰り返しになりますが、作中に一宮のことが出てくる、上総のある海岸が出てくるのは、なぜなのか、一般の読者にはまるで分かりません。芥川の伝記研究などというのは作品の発表当時はまだありませんので、読者には全く分からない。そこで、この一宮の意味は作家の体験、思い入れというものから考えていくしかないのだらうと思われれます。

晩年の芥川は、自分の人生は失敗だったという思いの中にありまして、生活力、あるいは体力も衰えて、死ぬことばかり考えているわけですね。そのときに何か自分がある地平、自分がある環境とは違うものとして一宮を思い浮かべているように思われれます。

ここで、では芥川にとって一宮とはどんな場所であったか、実際の芥川の一宮体験を辿ってみる、ということになるわけです。

先ほどの作品の中にも一宮に一〇年前に来たということが書かれてますけども、実は芥川は二回、一宮に来ております。一回目が大正三年で、二回目は大正五年です。

一回目の大正三年の一宮はどういう状況であったかというのを多少申し上げますと、鉄道が明治三〇年に開通して、一ノ宮駅ができます。その二年後、ですから明治三二年には一宮の海水浴場が開かれます。

この辺りから一宮に別荘を作る人が増えてきました、一宮は別荘地として有名になります。代表的な人としては、明治三四年に斎藤実が別荘をつくってます。斎藤実は後に総理大臣になり、二・二六事件で暗殺されますが、一宮に来た明治三四年当時は海軍少将で海軍総務長官だった

そうです。海軍総務長官というのは、当時の職名で、後の時代には海軍次官と呼ばれるようになるものです。

そのほかにも海軍関係者では加藤友三郎も一宮に別荘を持っています。この人も後の首相で、日本海海戦では三笠に乗って参謀長をしていた人です。そういうふうには海軍関係の人がかなり多いんですね。

一宮の役場に名士の別荘マップというのがあります、それを見ますと相当な数の別荘が立ち並んでいます。だいたい一〇〇軒ぐらいあったそうです。海軍関係者が多かったのは、一宮旧藩主の加納久宜公が鹿児島県知事になったことがありまして、その知事時代に鹿児島で非常に慕われたそうです。明治の海軍といえば薩摩閥ですので。その関係で一宮に別荘を持った海軍関係者が多かったのです。

海軍関係以外では平沼騏一郎などの政治家、出版界の大橋新太郎、これは博文館の社長です。あるいは財閥関係で三井家の三井八郎次郎という人ですね。こういった名士が別荘を持っています。

別荘があったところを多少回ってみましたけども、現在は跡形もなく、行っても何もありません。なかにはまだ残っているものもあるのかもしれないんですけども、今回はちょっと発見できませんでした。

その外には加納久朗という、旧藩主の家系の人も別荘を持っています。この人は大東亜戦争前後に活躍した人です。かなり剛胆な人だったらしく、マッカーサーなどもやり合ったり、あるいは東条英機などにも言いたいことを言って喧嘩をしたりとか、興味深い人物です。本来は銀行家だったようですが、後には千葉県知事なども務めています。一宮というのはすごい人がたくさん出たところなのですね。

さて、そういう別荘地である一宮に芥川は来ているわけですが、堀内

利器という友人に誘われて来たようです。この人は「りき」と読むのだろうと思います。「としき」と書いてある文献もあるんですけども、大半は「りき」と読んでいます。一宮藩主加納家の幕末の家老に堀内村次という人がいまして、その人の孫です。堀内利器は京都帝大へ進んで、理学博士になります。化粧品としての香料の研究をして、高砂香料、台湾有機合成会社などを設立します。後者は南方に作られた国策会社でした。府立三中で芥川の一級上で、ともに一高に進んだという縁がありました。府立三中というのは現在の両国高校です。

大正三年の夏休み、芥川は東京帝大の一年から二年になるときに一宮に来ています。数えて二三歳のときです。小説は一応処女作でありませぬ「老年」を発表しており、そのほかにイェーツやアナトール・フランスの作品の翻訳などをいくつか出しています。実はこの時期にたくさん作っていたのは短歌でして、雑誌に多数発表しています。どうも小説家になろうというような意思がはっきりしていたとは思えない時期です。

東京から一宮に来るわけですけども、当時は当然両国が始発駅になります。まだ総武線が東京方面に開通してませんので、両国駅で一宮行きに乗りました。当時は、今の内房線がまだ木更津までしか来ておらず、木更津線と呼ばれていました、外房線が大正二年に勝浦まで開通したところで、これが房総線と呼ばれていました。

両国から一宮までが、だいたい二時間半ぐらいかかるわけです。運行していたのが一日に上り下りどちらも八本ぐらいでした。大正三年刊行の「二宮案内記」には時刻表や、当時の一宮の駅の写真などが出ています。鉄道でやってきた一宮の町というのが当時どういう町であったかという、その様子を芥川は書簡で次のように書いています。「町の中央に

玉前神社と云ふ玉依姫をまつた社があつて、その左右に五六町づ、町が開展してゐるのだが、夕方散歩すると沢蟹が砂地の往来をもぞ／＼と這つてあるく程さびれてゐる。家も大抵藁葺で瓦屋根は数へる程しかない（中略）僕のとまつてゐた家はその数の少い瓦葺の中で更に数の少い二階家で且一宮の町に三軒しかない土蔵づくりの家であつた。商売は麻問屋で家族は十七になる娘を頭に弟が二人あるきりである。」（大正三年八月三十日）

この手紙のあて先は井川恭という人です。この人は高校時代からの芥川の親友でありまして、後に京都帝大の法学部教授になりますが。京大事件（滝川事件とも呼ばれますが）という、無政府主義者を取り締まる事件が起きたときに、京大を辞職した教授の一人です。

井川恭と芥川の親交は死ぬまで続きました。芥川の遺稿に「或旧友に送る手記」というのがあります。これは遺書なんです、これをあてた相手が恐らく井川恭であつたらう言われています。

この手紙に出ています麻問屋というのは渡辺家という堀内家の親戚で、当時堀内家が火災に遭つて人を入れられなかったので、親戚の渡辺家に泊めてもらったということらしいです。ここの家に八畳の奥座敷とこののがあつて、そこに寝起きたようです。

渡辺家は結構後まで残っていたのですが、昭和六〇年の九月に取り壊されていまして、現在は駐車場になっています。場所は、番地というと一宮町二九四五に当たります。これはいろいろ一宮の町で、昔麻問屋だった渡辺さんでどこでしょうねというの聞いて回つて、場所を教えてくださいまして、それを地図で確認しますとこの番地だったんです。一宮のメインストリートの東側にあります。

こういうところに泊まりながら、何をしてたのかというと、毎日海水浴をし続けるという日常だったようです。友だちへの手紙では、毎日義務のごとく海へ入ったり、午睡をしたりしていた、ということを書いています。

海に一緒に行ったのは堀内利器と蔭山金左衛門という人です。この人も一宮出身の人です。府立三中で芥川の二級下で、一高に進みました。蕉雨という雅号を持っているんですけども、詳しいことはあまりよく分かりません。その後どういいう道に進んだ人なのか、今回の調査では分かりませんでした。

こういう友人達と毎日海へ行った。一宮の市街地から一宮の海岸までというのは結構距離がありますので、船で毎日通ったというふうに書いておきます。

一ノ宮川を行き来する船というのが当時ありまして、『一宮案内記』の写真を見ますと、裸に近い屈強な船頭さんたちが船を漕いでいたようです。これに乗っていったというのは繊細で都会的な芥川という人とは何かイメージが合わなくて、面白く感じられません。

現在は裸の船頭さんたちはもうおりませんで、夏場は汽船が往復しています。

海に近い方の船着き場の隣に一宮館という旅館があります。これは、二年後に大正五年芥川が再び一宮に来たときに泊まる旅館です。恐らく船に乗って行き来しているときに見たのだらうと思われれます。

海水浴をしたときの様子も書簡に書いておきます。

「君は僕より一級上に堀内利器と云ふ専売特許の井戸掘機械のやうな名の男がゐたのをしつてゐるでせう一の宮はあの堀内の故郷です堀内の故

郷だけに又海も恐ろしく未開です海水浴と云ふのは名ばかりで実は波にぶんなぐられにはいるのだから堪りません海水浴場にある一の宮町役場の掲示にも泳げとはかいてないで背部を波にうたすべしとかいてあります悪くするとひつくりかえされて水のみます始めての日などは成塩からい水をのまされました此未開な海に堀内がつかつてゐる所は天下の奇観です手拭を後鉢巻きにして漢語で形容すると壮士慘不驕とでも云ひさうな風ですそれで当人は「此位きれいな海はないぜ」と得意になつてゐるのだから手がつけれません。」(大正三年七月二十八日 浅野三千三宛書簡)

芥川龍之介というとか非常に病弱で、弱々しいイメージがあるんですけども、実は小学校時代から隅田川の水泳教室というのに通つていまして、水泳は大変達者でした。ただ隅田川で泳いでいた人が、一宮の海を見ると、恐らく波の荒さに驚いただらうと思われれます。この書簡はその様子がよくわかります。

海水浴は当然明治以降に西欧から移入された習慣です。正確には明治一〇年代ぐらいだったそうです。漱石の『猫』(明治三八年〜三九年)には海水浴について次のような記述があります。「運動をしるの、牛乳の飲めの冷水を浴びるの、海の中へ飛び込め、夏になつたら山の中へこもつて当分霞を食らえのとくだらぬ注文を連発するやうになつたのは、西洋から神国へ伝染した輓近の病気で、やはりペスト、肺病、神経衰弱の一族と心得ていくらひだ」。西洋から日本に伝わってきた新しい習慣を並べているんですけども、ここに並べられているのは健康増進にかかわりのあるもので、漱石は西洋から来た健康増進法の一つとして海水浴を捉えているわけです。

明治一〇年代に日本に入ってきた海水浴は、初期のころは完全に医療行為の一つと見なされていました。従いまして、海水浴客は一般に「患者」と呼ばれています。それがさつき一宮の町役場の掲示「背部を波に打たすべし」という言葉とかかわっています。

最初は医療行為だったものが明治の後期ぐらいになりますと、漱石の文に出てきますように、健康者の健康増進法の一つというのに変わってきたらしいです。そして大正期になりますと、健康増進という意味あいはあるんですけども、それよりもむしろリフレッシェ、レジャー、行楽という方向に性質がどんどん変わっていったようです。このあたりのことは社会学などのほうで研究がなされています。

芥川龍之介が来ているのは、大正三年ですから、当然、行楽、レジャーのはずです。ただレジャーである以上は、あまり波が高くないほうが海水浴をやるにはよかったですらうと思われます。しかし、一宮の海岸というのには、あるいは九十九里海岸というのには、現在もそうですけども、非常に波が高く荒いのです。実は波が強いというのは、医療行為を目的とした海水浴場には必須とされた条件でした。

芥川は水泳教室に行つてますから泳げるのですが、明治一〇年代の海水浴というのは泳ぐということは全く想定してません。じつと海に入っているだけでした。それが海水浴なんです。ただし、海の中にじつと入っていると寒くなりますから、波に打たれて、その時の筋肉の動きで少し暖かくなるうということだったらしいです。あるいは波に打たれると神経によい影響を与えるともされています。

医療目的でありますので、長逗留することになります。すると海水浴場の付近に、海水浴旅館というのがたくさんできます。度々触れており

ます『一宮案内記』という観光案内にも、普通の旅館と海水浴旅館と二つを分けて書いてあります。水に漬かって長逗留して病気を治すというのは要するに、海水浴は日本では温泉の湯治と同じものとして移入されたと見ていいと思われます。それがだんだんレジャーに変わっていったようです。

一宮の海岸というのは海水浴が医療行為だった頃の名残がかなりあるということかも知れません。もちろん明治三二年に作られた海水浴場です。医療目的に限定していたわけではないと思うのですが、雰囲気的には海水浴が日本に移入された当時の、医療行為としての海水浴というのがかなり濃厚にあったのではないのでしょうか。

芥川のころは海水浴は一般的にはレジャーなのですけども、単純にレジャーで行つたのかというと、その割には一カ月という長逗留なんです。なおかつ一宮に行つた前後の芥川の手紙などを見ますと、胃病と神経衰弱というのを治そうと思うとか、あるいは帰ってきた後にだいたい胃の調子もよくなったというようなことを書いています。健康回復ということを考えていたのは間違いないのです。

短期的なレジャーでない、そういう形で海辺に滞在するというのは、最近あまり行われないう形ですけども、この当時は海岸での避暑というのが盛んでして、芥川も避暑で一宮に行つたわけです。単純な医療行為ではなく、リフレッシェと健康増進も兼ねた避暑という発想、あるいは思想が西洋から移入されています。それが芥川の長逗留となって現われているのです。

これも社会学などの研究を見ますといろいろと書いてあるのですが、大正のころになると都市環境が悪化します。そこで、東京などに住んで

いる人は、長期間、避暑という形で郊外、あるいは海岸に向かうという習慣ができる。健康増進ということとリフレッシュが合わさって、避暑が大変流行するのが大正期であります。

国会図書館などで検索すると分かるんですけども、明治の終わりぐらいから『避暑案内』とか『学生避暑案内』とか言われる小冊子のたぐい的大量に出てきます。健康増進、あるいは保養、避暑というのは一種のブームでした。

ただ避暑というのが、昭和一〇年代ぐらいからはだんだん短くなったそうできて、なおかつ海辺はあまり避暑では使われなくなり、だんだん高原のほうが多くなったようです。われわれの今の時代には、海岸べたで一カ月も逗留して、避暑をするという習慣は見られなくなっていますので、芥川の上流に近き湖沼を洞庭と名づけ桜樹を其上に植ゑ樹間多はブームだったのですね。

そのように毎日海に行っているわけですけども、その生活ぶりについて身近にいた人の証言などもあります。

渡辺家で芥川の食事の世話をしていた小林トリさんという方の話を、坂本一敏さんという方が本に収録しています。「堀内に頼まれて、芥川さんの三度の食事の世話をすることとなった。彼は堀内と毎日のように海岸に出かけたりしていた。部屋には机のそばに原稿用紙がもみくちゃにして一杯ちらかっていた。口数は少なく、何かぶつぶつ独り言を云っていた。変わった人だなと思った」(坂本一敏『芥川龍之介と上総一宮』昭和六一年二月)。何となく芥川の様子が分かるような話です。

原稿用紙がもみくちゃになっていたとありますように、書き物はいろいろとやっています、この一宮滞在中に、翻訳を一つ仕上げ、小説

を一つ書いております。友たちへの手紙では読書はしなかったなどと言っていますが、実際には論語を読んだり、グレゴリー夫人というアイランドの作家の本を読んだりしている。さっき出てきましたイエーツもアイランドの作家でして、この時期はどうもアイランドにかなり興味があつたようです。

そういう毎日の中で、一宮の市街と近隣を歩き回ったりもしています。その中で度々芥川の手紙に出てくる場所がありまして、それが一宮の洞庭湖です。中国の洞庭湖と同じ名前ですが、一宮のは小さくて、一宮の人は怒るかも知れませんが、まあ、池と言ったほうがイメージしやすいかと思います。ただこの洞庭湖に芥川は非常に感動したらしくて、何度も手紙に書いています。

「一の宮川の上流に近き湖沼を洞庭と名づけ桜樹を其上に植ゑ樹間多賀城の古碑に擬せる石碣を立て桜樹一百有五十株を天女に献ずる文を碑面に刻したる皆老侯(加納久徴引用者注)が風流の余戯に候」(大正三年八月六日 菅虎雄宛書簡)。加納久徴公が池の修復をし、そこを洞庭と名付けて、桜を植え、その桜を天女に献ずるといふ碑文を書いた、その事跡に非常に感心しているのです。

この石碑は一宮に行けばすぐ見れます。碑文はもうほとんど何が書いてあるのか分からないのですが、表のほうには洞庭湖と確か書いてあつたと思います。裏のほうには「此地享保十一年丙午、從五位藤原朝臣久通始所受領也、六世孫從五位下藤原朝臣久徴、呈桜樹數株于天女以修造焉 天保十五年三月十五日」と彫つてあるらしいんですけども、今ではほとんど見えません。いま挙げましたのは一宮の町史に書いてあるものを写してきたんですけども、これがほかの本を見ますとまた文面が少し

違ったりしています。どれが正しいのかは私では分かりませんが、一応町史のものをここに出してみました。

このお話をするに当って、この間また洞庭湖にいつてみたのですが、そのときには草がちゃんと刈ってありまして、石碑も見られるようになってました。数年前、夏に行ったときにはほとんど草の中に埋もれてまして、草をかき分けて石碑を見た記憶があります。洞庭湖のそばに、車を止められる場所がありまして、そのすぐそばの土手の上に石碑があるんですが、ちょっと寂しい気がしました。それが今では、いつできたのかは私は存じ上げないのですが、散策路もできて非常にきれいになっています。恐らく桜の季節などには大勢人が集まるのでしょう。いいところですよ。

芥川の一宮滞在について語られる場合には常に触れられるものに芥川の恋愛があります。一宮は芥川にとっては若い頃の恋愛と共に思い出される土地だったであろうと思われまます。

大正三年、一回目の滞在のときには芥川の心の中にいたのは吉田弥生という女性でした。芥川も吉田弥生も共に結婚したいという意思があったのですが、結局これは芥川の養父母と叔母の反対で破談となります。どうやら結婚できそうにないというのが分かった状態で一宮に来たらしいんです。結婚できないということ非常に落ち込んでいるのを、堀内利器が見るに見かねて一宮に誘ったということのようです。

吉田弥生という人は私生児だったらしくて、それがどうも芥川家としては引っかけたのではないかと言われています。ほかにも家格が違うとか何とか原因がいろいろあったらしいので、養家の反対の原因はあまりはつきりしないんですけれども、出生の問題が大きかったのではない

かというのが、伝記研究などでは有力になってます。

吉田弥生を思いながら詠んだ歌が「客中恋」としてひとまとめに雑誌に発表されています。

初夏の都大路の夕あかりふた、び君とゆくよしもがな
海は今青きまぶたをしば、たき静に夜を待てるならじか

黒船のとほき灯にさへ若人は涙落としぬ恋の如くに

何をかもさは歎くらむ旅人よ蜜柑畑の棚によりつ、

ときすてし縞の夏帯の水あさぎなまめくま、に夏や往にけむ

〔客中恋〕〔心の花〕大正三年九月一日

もっとたくさんあるんですけども、その中から五つほど抜き出してみました。どれも非常に暗い、悲しい歌です。雑誌の発表時期から考えて、一宮にいた頃と同じような心境だったのではないかと思われまます。非常に苦しい恋だったわけですよ。

このように恋愛に悩んでいる芥川は、一宮にあまりいい印象を持たなかったらしくて、井川あての手紙に次のように書いています。「東京へかへつてから一週間ばかりになる 体は大分い、胃病も癒つたし可成（僕としては）肥つた 瘦せまいと思つて此頃は体操もしてゐる／一の宮の町は不景気な屈屈な町だった」（前掲大正三年八月三十日 井川恭宛書簡）。非常に失礼なことを書いております。しかし、これは恋愛の悩みということが片方にありまして、そのために一宮があまり面白くはなかったということだろうと思われまます。しかし、一宮海岸の自然は絶賛しております。「一の宮の自然は rough な所がいい Dune なんぞアイ

ルランドのものにかいてあるやうなのがある 夕方は殊にいい」(大正三年八月二十一日 井川恭宛書簡)

ラフなところがいいというのを書いています。これが次第次第に発展していきまして、芸術に対する理解が変わっていくんです。「僕は此頃ラフでも力のあるものが面白くなつた。何故だか自分にもよくわからない (中略) / この前の君の手紙に絵の事があつたから云ふが絵にも僕は好みがちがつて来た ほんとうと云ふとおかしいかもしれないが此頃になつてほんとうにゴーホの絵がわかりかけたやうな気がする さうして之が全ての画に対するほんとうの理解のやうな気がする もつと大胆に云へば之がすべての芸術に対するほんとうの理解かもしれないと思ふ」(大正三年十一月三十日 井川恭宛書簡)

芥川という作家の全体的なイメージとしては、あまりこういう力強いものを求めたようには見えないんですが、一宮から帰ってきた芥川は、ラフで力のあるものが本当の芸術であると考えているのです。

こういう見解にはいろんなものが影響していると思われれます。例えば、ロマンランの『ジャン・クリストフ』です。芥川はこの頃この小説を耽読していて大変感動しています。「ジャン・クリストフ」というのは、ご存じのように不撓不屈の芸術家が、どんな困難な目に遭つても逞しく生きていくという作品です。この作品から横溢する生命力というのはたしかに大変なものがありまして、芥川はそれに感動し、そういうものを求めていたと思われれます。

しかしそういう文芸上の影響と同時に、一宮の自然というものに触発された、という面も重要であろうと思われれます。その一宮の自然をもとにして詠んだ歌があります。「砂上遅日」という大正四年の三月に発

表したものです。

うつ、なきまひるの海は砂のむた雲母のごとくまばゆくもあるか
いさ、波生れも出でねと高天ゆ光はちぎにふれり光は
うつそみの女人眠るとまかゞよふ巨海は息をひそむらむかも
いさ、波かゞよふきはみはるばると弘法麦の葉は照りゆらぎ
雲の影おつるすなわちふかぶかと弘法麦は青みふすかも

(「砂上遅日」(「未来」大正四年二月一日))

これも五つほど挙げてみました。私は歌の鑑賞力がないので、ここは石割透さんという芥川研究家の方の評に頼りますと、この「砂上遅日」というのは、雄大で素朴な生命の感動を表しているということです。ただ石割氏は、「砂上遅日」としてまとめられた歌をあまり評価していません。これらの歌は斎藤茂吉の短歌集『あらたま』に後にまとめられる歌を芥川が読んで、その影響のもとに詠まれた歌なのですが、石割透さんは茂吉の歌を大変評価しています。茂吉の歌は深処、深いところに徹した美を持つている。正直に自己を突き詰めた痛々しい魂が感じられる。自意識に疲れた近代人の痛ましさというのを描いている。ということなのです。しかし、芥川のほうにはそういう近代人の痛ましさといったようなものが感じられない。だから、あまり面白くない。ということ。確かに読むとそんな気がします。自然の雄大さ、あるいは生命力というものは感じられるのですけれども、近代人が持っているなにか屈折したようなものというのは、この芥川が書いた「砂上遅日」の歌にはないのだ、と言われれば、確かにそうかなという気がします。

ただ、実はそちらのほうが注目すべきことなのではないか。つまり茂吉は近代人の痛ましさを歌にしたかもしれないのですけども、茂吉の歌の場合には、特に『あらたま』に入っているものは万葉集の言葉などを多用した、かなり古代的な雰囲気を持つ歌が多かったわけです。

茂吉のように歌を詠みたいと思ったときに、芥川龍之介が思い出したのが一宮の海岸であった。なおかつ一宮の海岸を詠もうとしたときに、近代人の屈折した心情などを詠もうとしなかったということに注目してもいいのではないか。そこが一宮の自然の持っていたもので、むしろ積極的に見ていける側面なのではないかと思うのです。芥川にとっては近代人の痛ましさよりも、自然の生命力、野性的な生命力、そういうものへのあこがれのほうが強かったのではないのでしょうか。だから出来上がったものは茂吉の歌から離れたものになっていったのではないかと思うのです。

少なくとも茂吉に触発されて歌を詠んだときに、芥川なりの変換が行われているという点は間違いないわけで、その変換をもたらししたのは恐らく一宮の自然であったろうと考えられます。同時に近代人の痛みというようなものを持たない、自然の生命力をただ純粹に出していくような傾向を、芥川龍之介は持っていたわけで、そこも注目していいのではないのでしょうか。

小説の作品の中では、ほとんどそれは表現されません。晩年の作品では「西方の人」などに、野生の呼び声という言葉があります。あるいは、志賀直哉に古代的な生命力というのを感じて、それに恐れを抱くというような傾向も晩年にはあります。実は、若いときからあこがれつつ、結局表現できなかったものが、この野性的な生命力だったのではないかと

思われます。

ここに一宮と芥川との関係で一つの可能性を見ることができるといえると思います。ただ一宮の海岸というのは、この間行ってみますともうないんですね。護岸のセメントがありまして、確か四、五年前に行ったときには、この護岸の先に五〇メートル幅くらいの海岸があったんです。そこに確か海の家とかが建っていたと思います。全国的に浸食される砂浜を守るのは大変なようですが、やや寂しい感じではあります。

芥川龍之介は海岸の印象としては、波の荒さと同時に、浜防風、弘法麦などの植物がたくさんあるということを何度も手紙にも書いてます。歌の中にも、弘法麦をたくさん詠んでいます。前に挙げました「海のほとり」でも弘法麦を書いていきます。

しゃべるのが大変下手で、時間配分も全く分かっておりませんが、二回目の大正五年の滞在については触れる時間がなくなってしまうました。大変中途半端なことで申し訳ありませんが、お話は以上というところで失礼させていただきます。

(わたなべ たく・本学語学教育センター助教)